

オオサカン楽員の 楽器の小屋～オオサカンサウンドの源～

楽員と楽器の関係を探る連載企画、第4弾は **バスーン奏者 清水美咲**！//
楽器へのこだわりや大事にしていることを伺います。

バスーン
清水 美咲 Misaki Shimizu



現在使っている楽器と、選んだ理由は？

使用楽器：YAMAHA(ヤマハ) YFG-812



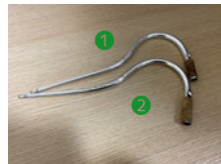
吹奏楽の音圧の中でも支えとなれるような重厚な低音と、バスーンらしい豊かな響きが魅力でこの楽器を選びました。購入したのはかなり前になるのですが今でも色褪せない艶やかな響きが気に入っています。

各パーツのこだわりポイントは？

【ボーカル(クルーク)】

①HECKEL(ヘッケル) CC2 ②YAMAHA(ヤマハ) SUPER BOCAL CN1S

メインで使用しているのは①です。HECKELのスタンダードなタイプで、高音域から低音域までバランスよく鳴り、発音もしやすいので愛用しています。②は高音域が鳴らしやすいため、高音の多い曲で使用しています。リードからの振動を楽器本体に伝えるだけではなく、ボーカルの振動自体も音色に影響を与えるため、曲やホールによって使い分けるようにしています。



【ランサー】

バスーンは通常5kgほどの重さなのですが、YFG-812は太管と言われる肉厚な管体(最大4mmの厚さ)が特徴で通常よりも重くなっています。ストラップをかけても必ず左手で支えなければならず腕への負担が大きいのでランサーという重さを軽減する部品を使用しています。これにより運指も比較的にラクに行えます。



リードについて詳しく教えてください。

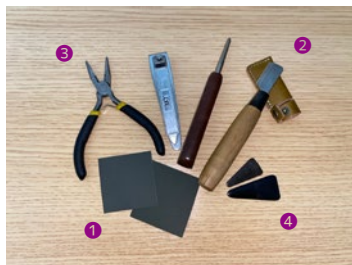


葦などで出来た板を2枚重ねる「ダブルリード」の楽器(オーボエ・バスーン)は、奏者自身がリードを作ることが多く、その仕上がりが音色や音程など、音の大部分に作用します。

- ①糸を巻いて組み立てた状態のもの。リード自体は削り始めで、まだまだ分厚い状態です。
- ②ブラークと呼ばれる黒い部品(下の写真内④)をリードの間に挟み、先端を薄く削っていきます。
- ③このくらいの薄さまで削ったらひとまず完成です。

現在は全長56mm、削ってある部分が28mmになるようにしており、完成後も紙やすりやナイフなどを用いて微調整しています。材料は色々なものを試しながら作っています。時折楽器店などで完成リードを購入して、どんなリードが流行っているのか、他の人がどういう作り方をしているのかを参考にしています。

練習の際、常に持ち歩いているものはなんですか？



管内部の水気を拭き取るのに必須のスワブは管(部位)によって違うものを使用しているため、常に3種類持ち歩いています。また、リードの調整をするための紙やすり(①)・リードナイフ(②)・ペンチ(③)も必需品です。また、リードケースは常に2つ入れており、リードを使い分けたり、環境に合わせて調整したりするようにしています。その他、演奏前のリードを浸ける水入れは深く浸けすぎないように浅めのものを使用しています。



↑スワブ



↑リードケース



←水入れ



楽器を演奏する時に大事にしていることは？

バスーンはとぼけたような特徴的な音をしています。そのため、曲の中でバスーンの音色が全面に出るべきなのか、隠し味的に潜んでいた方が良いのか、作曲家がどういう意図をもって楽譜に書いているのかを考えて演奏しています。オオサカンにおいては、「オオサカンサウンド」を作り上げる一員であることを常に念頭におき、演奏者全員で1つのサウンドを作るイメージを持って演奏しています。

あなたにとって「バスーン」とは？

中学校で吹奏楽部に入った当初は名前も姿や形も全く知らない状態で、流されるまま演奏することが決まった楽器でした。ですが、これまでいろいろな音楽に触れながら一緒に歩み、時には一緒に立ち止まり…振り返ってみれば私の人生において欠かすことのできない存在になりました。これからも一緒に音楽を奏でる、一言で表すなら「相棒」のような存在です。